

1. 研究課題・代表者名

研究課題	近代発展規範（民主主義・市場原理・科学的論理思考）の揺らぎの本質の解明 —近代社会規範の再構築を求めて—
研究代表者	黒田昌裕、有本建男

2. 研究実績の概要

第1回の研究会以来、今まで4回の研究会を4名のメンバーで開催してきた。コロナ禍の中、会議はすべて、Zoom会議の形式で行い、各人の研究課題にもとづき、相互の議論を繰り返してきた。

研究分野のことなる4名の研究者の間で、総合的な成果を収めるに至っていないが、相互の理解を深めあう段階である。第2回は、黒田より、経済学の観点から、「近代発展の基本の揺らぎ」に関して問題提起をおこない、第3回は、駒井より、生命科学の観点から、「生命史視点からの近代研究の規範」について報告があった、第4回は、隠岐より、「専門性と相互不理解」と題する報告があり、異分野間での相互理解のあり方に関して議論を行った。現時点では、特にまとまった成果を得るほどの議論が尽くされていないが、以下の報告、成果を挙げておく。

- ・有本建男「科学技術基本法体系の変容：1995から2020——理念と現実と実行の課題」
『学術の動向』2021年5月号、特集「学術研究と科学技術基本法—その科学技術史的検討」
- ・Kuroda, M and H. Michel “Decomposing Capital Service Platform: Evaluation of Knowledge Stocks as Intangible Assets by Static/Dynamic Total Factor Productivity Measurement”, Asian Development Review (2021), Asian Development Bank.

3. 今後の研究の推進方策

学際的な、我々の課題は、それぞれの研究者間で、相互に問題意識を理解し、議論を重ねることが重要であると考えている。コロナ禍の現状では、まだお互いの問題意識を披露して、議論を重ねるという段階であり、それを総合化していくには、まだ時間を要する。

次回は、4月9日の会議を予定しており、これまでの各人の問題意識の確認と集約に向けての目標を再確認する予定である。

5月以降、対面の会議も可能になると考えており、より集約的な議論が可能になると期待している。

現代の科学と社会の関係性についての歴史的視点の整理を踏まえて、近代発展規範（民主主義・市場原理・科学的論理思考）の揺らぎの本質の解明に関して、各研究分野から「近代社会規範の再構築の方向を探る」という課題への接近を図っていきたい。その際、このメンバー以外の研究者との議論を深めることも重要だと考えている。

1. 研究課題・代表者名

研究課題	科学・技術が関与する課題解決の活動サイクルが進展するための組織構築の在り方を探る：認知症を対象として
研究代表者	狩野光伸

2. 研究実績の概要

認知症を「現場」とし、「観察解析」している人材と、「構成的活動を行っている」人材が、同時に出席する場を設定し、互いの知見と意見の柔軟な交換を通じて、科学・技術が関与する課題解決の活動サイクルが進展するための組織構築の在り方を探ることを、本研究の目的とした。結果、次のような問題意識が共有された。「観察解析」側では、人文社会学系は現象論的に、例えば「認知症フレンドリーな街づくり」の在り方を解析するが、それに例えば生物学的裏付けが呼応していないこと。「解析」そして「構成」側では個々人で興味は持っても、専門に直接関連しないと、着手のきっかけが得られていないこと。着手には専門と関連付けできる「翻訳」を誰かがする必要はあるだろうこと。「専門から一步も出ない」姿勢も少なくなく、日本社会には専門から外れるべきでない、他者の領域に基本かかわらない、という価値観が存在する可能性。関係して「真の当事者（経験者）」以外は語ってはいけないという意識がある可能性。その結果、かえって関係者が減っている可能性。企業の参画が成果の実現に本来有意義かつ必要だが、実態としては社会貢献（CSR）的意義での参画にとどまる可能性。企業参加ではビジネスに取り込まれる側面を恐れる当事者が存在すること。以上からは、各ステイクホルダーが、同じ対象に関与し、その解決を図ることは合意されたとして、個の背景・文脈に応じて関与の仕方は異なる上に、他のステイクホルダーを巻き込んだ解決手法の実施がなされるに至った場合に、どの手法を優先させるかといったことでの「合意形成」が一つのキーワードとなりうる。

3. 今後の研究の推進方策

ネット会議が頻用される状況において、ある程度、普遍的に活用できる手法開発をワークショップの主眼とし、どんな条件設定が必要かを討論。共通テーマを設定し、それについて現場の実態を知り、かつ、そうした個別知見の一般化を図ろうという努力をしている人のインプットから会議を開始して議論を刺激するという方法の試行を考える。これは必ずしも人としての当事者とは限らない。期待が強すぎてしまう可能性や一般化のプロセスに必ずしも乗らないからである。それよりは、匿名化された具体的事例（例えば経産省のまとめている高齢化社会課題ニーズマップ）を活用することを考える。また次のことも試行していく。自然科学と社会科学の融合という建付け、参加者が初対面でも自らできることと自らは越えられないことの共有ができるための信頼構築、参加依頼の際に前提知識は要らず興味で募ること、参加者の役割やポジショニングを明確にすること、中立的な立場からのファシリテーション・モデレーションを行うこと、多くの参加者はあまり他分野とかかわってこなかった人に依頼すること、それらを通じて新たな出会いとつながりを作りだすこと。このためにアバターを活用する可能性。こうした試行会議の様子の録画と配信。また、サイエンスライターに依頼して、レポートを作成すること。これらを、実現可能性を勘案しつつ試行してゆく。